



これまでの研究を振り返って

変化の時代を過ごして

調査研究科 安藤 晴夫

公害研究所水質部に異動して来た1977年は、初めて製品としてのパーソナルコンピュータ(PC)が売り出された年でした。また、それから数年後、研究所内に当時最新の大型コンピュータを用いた東京都環境情報システムの整備が開始され、システムが使用できる状況になりました。そして、この2つの出来事が、後の研究の方向を決めたように思います。自宅で最初に購入したPCは、メモリが4KB、40×25文字表示のモノクロディスプレイ内臓で、扱えるデータ量も限られていましたが、電卓では困難であった相関係数が容易に計算できただけで非常に感激したことを覚えています。一方、大型コンピュータの方は、メモリが数MB、ハードディスク容量が約25GBで、現在の廉価なノートPCと比較しても性能は劣りますが、大学等から多くの見学者がありました。また、このシステムにはカラーグラフィック端末が付属し、衛星画像データの解析なども可能で、画像処理プログラムを作成したりしました。またデータベースを構築するために、環境モニタリングデータの電子化が行われていて、後に、東京湾の水質データベースを作成する際の知識を得ることができました。

その後のPCの進化は目覚しく、研究所ではまず分析機器の端末として、次に文書作成、データ解析、画像処理へと、誰もが日常的に使用するようになり、その性能も初期のスパコンを凌駕する時代になりました。一方、大型コンピュータは一部を除いて姿を消してしまいました。

こうした変化の大きい時代を振り返って、2つのことを実感しました。一つ目は、知識の陳腐化ということです。大型コンピュータの全盛期には、高度なデータ処理を行うためには、それを操作するための言語等を特別に学ぶ必要がありました。しかし次第に主役がPCに代わってくると、それらの知識の多くは役に立たないものになり、逆にそれに固執しているとPCが使えないことにもなりかねませんでした。このことは、単にPCだけでなく、分析機器やソフトウェアなどでも同様で、特に操作方法などの知識は常に陳腐化する恐れがあることを理解しておく必要があります。その意味で技術的動向の把握が研究にとって大変重要であると考えてきました。

2つ目は、データの重要性です。特に東京都や他の自治体が長期間蓄積してきたモニタリングデータは、非常に貴重なものであり、安定的にモニタリングを続けていくことは、自治体の最も重要な責務だと思います。

振り返ると、研究方法が時代に流されてしまったように思いますが、情報処理技術は適用範囲が広く、酸性雨、東京湾、ヒートアイランドと多くの分野の研究に関わることができて感謝しています。



全環研会長賞受賞



調査研究科安藤晴夫研究員は、平成22年2月25日、全国環境研協議会会長賞を受賞し、表彰を受けました。

安藤研究員は、当研究所において一貫して、東京都内の河川および東京湾の水環境保全と生物生息環境に関する研究に携わり、JICA短期専門家として水環境保全に関する海外技術協力なども行ってきました。また近年は研究分野の枠にとらわれず、東京のヒートアイランドの実態を明らかにするなど、都の施策にも大きく貢献しました。これら長年にわたる業績と研究員としての模範的な姿勢が認められての受賞となりました。

